おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和５(2023)年
７月号
通巻 635 号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和５年７月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

京都、神泉苑　　中村千久佐さん撮影（文・３頁、大倭会文化行事報告）

再録　昭和46(1971)年6月23日発行『すさのお』第57号より

こんな場合もある　～憑依霊の一面～（三）

法主　矢追日聖（満59歳）

あの日から九日たった十一月二十五日、千代さんは強硬な霊的妨害を押し切って、主人を伴い第二回目の大倭訪問に成功した。

先日帰宅してから今日に至るその間の霊障などを聞く。心臓の方は以前より少し楽になり、いたずらも一寸ゆるかしくなったようである。けれども頭の上で囁くことや、あれこれと指示することは大して変わっていないようだ。主人は何が何だかさっぱり分からないが、何とかして世間並の家庭婦人に戻ってくれることのみを希望しているようである。

大倭に着くまでは絶えず胸を締めつけられていたが、只今はそれが無くなったので、気分も爽快で体も楽になったと千代さんは喜ぶ。

この奥さんは精神病患者ではなく、憑依霊のあることによって起こる現象であることを、私は主人に理解させるために、例のタヌキを引き寄せて千代さんにそれを憑からせた。

出たかと思うと即座に両手をついて低音で、「御免なさい御免なさい……約束を破りました、お許し下さい。今後決していたずらは致しませんから、どうぞ許して下さい……」と、連続的に米搗きバッタのように詫びる。

話は分かっても実行の伴わないのが低級霊の哀れさである。口で何度説き聞かせても駄目だと思ったので、私は大倭に千年以上棲みついている同類の低級霊を引き寄せた。この固有霊（宮丸）は永年私が宗教的に修練を積ませ教育もしてあ

るので、加美の摂理や人間の道についてもかなり理解し、身にもつけている。

私は「宮丸」に、この憑依霊を大倭のあちこちへ案内し、一寸奥を覗かせることを命じた。宮丸はあれこれと説明しながら霊界の大倭へ連れ込んでいった。その間、千代さんの体は魂の抜けた人間が座っているようで、無表情、無意識のまま静座して憑依霊の戻りを待っているような形である。

数分後、息を切らしてかけ戻った態度で、

「あっ恐ろしい恐ろしい、こんな恐ろしい大倭があるなんて夢にも思わなかった。許して下さい、分かりました。これからは絶対に川田さんにいたずらは致しません、お許し下さい」

「宮丸と大倭を散歩してよかっただろう。何を教えてもらったのじゃ」

「何も教えてくれやせん……法主様の言われることに逆らうようなヤツには口で言う必要がないと言って、わしの体をあちこちこづき廻しよる。ところが分からんことは、こづかれて苦しいのに逃げもできなきゃ抵抗もできない。あほらしいが仕方がなかった。

宮丸さんが、あそこを見よと言ったので頭を上げると、ぼ～んとした白色のにぶい光が遠く向こうにあった。と思うと、頭も手も足もナメクジに塩を掛けたように縮こまって自分が消え失せてしまうような恐ろしい責め苦にあった。もうこりごりだ……宮丸さん、許して……助けて……と頼んでようやく連れ戻してもらった、二度と行く所じゃない」

「そりゃよかった……何回でも案内させよう。大倭の奥が一寸覗けてよかったね……言うことを聞かなきゃ、今覗いてきた恐ろしい所へほり込んでやるぞ」

「あんな恐ろしいとこ……聞きます聞きます……」

と言いながら、頭を畳につけたまま、ずるずると後ずさりし廊下に出て、さらに玄関の控えの間まで逃げ込んでうずくまってしまった。

霊気で引き寄せると、軋むように元の位置に訳なく戻って来た。

こうして三時間余りサニワしたあと憑依霊をはずしたが、前回のような苦しみもなく簡単に元の意識になる。千代さんは何かしら体も軽く、重苦しさがさっぱり無くなって助かりましたと礼を言っていた。

しかしこの種の霊は、絶対いたずらはしないと約束しても、大倭を離れるとすぐ気が変わるからその点よく注意するよう主人にも懇ろに話して、夕方帰らせた。

現世は来世に続いている

三回目、つまり二十四日後の十二月十九日、千代さんは初めて単身で訪れてきた。顔色は見違えるほどよくなり、とぼついて（※そわそわ）歩いていた足もとがしっかりしていたので嬉しかった。今回は千代さんに、憑依霊のことや、それに対する心構え、生活態度などについて語っておいた。

明けて昭和四十六年四月六日、千代さんは主人を連れて来る。家に戻ると憑依霊は約束不履行になる、大倭へ来ると全く骨抜きになる。この時も主人に向かって両手をつき、過去のいたずらを詫び、今後は立派な家庭婦人になってもらうように助力すると誓っていた。

四日後の禊会に千代さんは初めて参加した。十日の夜から十一日の朝にかけて徹夜の行事である。この時はすっかり兜を脱いだ態度を示し、杉坂行者とは縁を切り、千代さんを守るから名前をつけてほしいと言う。「不動丸」とつけてやった。

これには訳がある。この日は禊会だったので神仏を表看板にして、その裏で悪質行為をやった者は、死後の世界ではどうなっているか？　その苦悩にあえぐ霊界の実状を、私の霊波に乗せて如実に見せ、さらにこの不動丸の前身は、元女性の行者で、善良な多くの人々を誑かし、罪業の数々を重ねたため、下道タヌキに落とされたという因果をも示顕して教化したからである。

六回目、即ち五月十三日であった。この日も千代さんは単身で来た。家を出る時、「どうしても大倭へ行くのか、行かないでくれ」と頭で囁き哀願を繰り返すと、千代さんは笑っていた。いたずらも殆ど無くなったようだが、時折頭に何かをかぶせられたように鈍重ないやな感じがすることもあると言う。

この日、千代さんは大倭で泊る予定だったので、茶の間で私達と夕食を共にした。来た早々から不動丸は憑かりっぱなし。夕飯時だけ除けさせたが、済めばすぐ憑かった。家族並である。不動丸を交えて世俗話を交わす。

夜も更けてきたので、千代さんに戻そうとすると、不動丸は、

「このままで寝屋へ行きたい。間違いなく連れて行く……川田さんを充分眠らせたあと、自分は宮丸さんに会って朝までゆっくり大倭の話を聞きたいので……頼みます……」。

もう大丈夫と思ったのでそのまま外へ出したが、目をつぶったまま、茂る大倭の木立の間をぬって暗がりの中へ消えていった。

前世を語る不動丸

明けて十四日正午過ぎ、千代さんは清々とした

表情で瑞光院（私宅）へ来る。寒冷前線の南下によって、この日は凄く雷鳴轟き暴風雨の襲来となる。昨夜、不動丸は宮丸から何を教えられたのか知らないが、憑かったかと思うと急に態度が変わり、不動丸の前身だった女行者にすり変わっていたのである。

修験者独特の合掌を示し、膝を割り背を垂直に伸ばし、両眼はパッチリ開けて（不動丸の時は両眼は閉じている）、人間としての初対面の挨拶を懇ろに述べている。

「私は縁あって修験道に入り、荒行に荒行を重ねた女行者でございます。みにくい姿で御前を汚し、大倭の神々の力によって、今、私は私を知ることができました。広大無辺な神々の大慈悲に対しまして心から感謝申し上げます。

私は神の道、仏の道をよく心得えていたつもりでしたが、行者として世の人々を助ける段になるにつれて、法力、行力、経力が絶対的と考えるようになり、霊験を顕わすことに専念致しました。

今、振り返って想いますに、その裏には物欲と色欲と権威欲があったのです。大倭でそれがはっきり分かりました。畜生道に落とされたのも、当然、己れが犯した罪業の報いであることをも悟れました。杉坂行者と縁を結ばせた因縁果の深さ、しみじみと心に迫るものを感じます。ああ恐ろしい……どうぞ、哀れな女行者の末路を御覧じて……畜生道からお救い下さい」

この日の夕方、千代さんは憑依霊のまま名古屋へ帰った。あと私たちは道中を案じていたが、約束通り安着の電話があったので一同安堵した。それは千代さんではなく、憑依霊の声だった。

私は数知れぬサニワを務めた経験はあるが、記述したのはこれが初めてであることを申し添えておく。（完）

昭和四十六年六月十五日、日聖記

第３４８回大倭会文化行事報告

世話係として

大阪府枚方市　林　修三

令和5年5月21日、日曜日。5月の爽やかな気候にも恵まれ、3年ぶりの文化行事を行うことが出来た。目的地は京都市内の神泉苑と二条城。当日午前10時半、ＪＲ二条駅改札口に集まられた方は12名。遠方から来ていただいた方々もあり、賑々しい再開となった。

さて、私達がそこから最初に目指したのは、神泉苑の中に小さな祠として祀られているに過ぎない歳徳神。今では、陰陽道で一年の福徳をつかさどる神として崇められている、現世利益としての神だが、実は又、歳徳神は奇稲田姫命の別名であることも知られている。そこから、天皇家の禁苑の中にも、その名を隠し、細々ながらも大倭の主宰神が祭られている気がしており、今回、大倭に縁のある方々と、その様な思いで当地を訪れ、各々が祈りを伝えることが出来たのは喜ばしいことであった。

又、この日は普段、足を踏みいれることの出来ない善女龍王が住まいするという池正面の社殿前が開放されており、明るく澄みきった大気の中で参拝出来たことも嬉しいことであった。

ここで、この後の詳しい内容は、参加者のお一人である金澤秀郎さんの書かれた記事を楽しみにしていただくことにするが、大倭の文化行事に相応しい、参加者どうしの話も弾む、楽しい集いとなった。

今、世の中はコロナ騒ぎの影響によるものか、暗い悪質な事件が引き続き起こり、各地の災害も頻発している。この時代、ささやかでも人と人の心楽しい結び付きは必要なものに思える。大倭会文化行事も、そんな意味のある催しの一つであることを願って、その存続を祈りたい。

神泉苑・二条城の散策

大阪府河内長野市　金澤　秀郎

「大倭を本当に分かるには、文化行事に参加したらいいですよ」という林修三さんのアドバイスに素直にしたがって、文化行事「神泉苑にクシイナダヒメを訪ねて」に参加しました。5月21日は、少し暑いくらいの好天に恵まれ、岸野春子さんと旧交を温めながら、神泉苑を目指しました。

大阪に住み、高校の社会科の教師をしていたにもかかわらず、初めての神泉苑と二条城でした。神泉苑は、延暦13年（７９４）、桓武天皇により禁苑（宮中の庭園）として造営されたもので、平安京（大内裏）の南東隣に位置し、南北４町東西２町の規模を有する苑池であったそうです。８２４年に空海が勅命を受け、善女龍王を勧請して見事に雨を降らせたことで有名です。毎年5月の２～４日に神泉苑祭が開催されます。静御前の舞や雅楽奉納が行われますが、実はこのお祭りで横笛（龍笛）を奏でた辻松大輔さんが、この度の行事に参加され、見事な音色を池いっぱい響き渡らせました。我々だけではなく善女龍王様もさぞお慶びであったでしょう。辻松さんと私は、毎月第一土曜日にザ・リッツカールトン大阪で開かれる大徳寺昭輝さんの勉強会をこよなく愛する仲間なのです。

ここで少し、大徳寺昭輝さんを紹介させていただきます。年齢は今年が還暦。18歳の時、親神の命により「お社」となられ、22歳の時、御神縁により芹沢光治良さんと出会われました。芹沢光治良さんは、当時88歳で奥様を亡くされ、生きる意

欲がなくなった時でした。かつて幕末の天明の世に「お社」となられた中山みきさん（親様）が、大徳寺昭輝さんを通して、芹沢光治良さんに小説を書くように懇願されたのです。そして、その後8年間、大徳寺昭輝さんが、芹沢光治良邸を訪れ、大徳寺昭輝さんがチャネリングをした中山みきさん（親様）のご指導の下、『神のシリーズ』という8冊が生まれました。「文学は、物いわぬ、神の意思に、言葉を与えることである」という文章で始まる『神のシリーズ』は、中山みきさん（親様）の示唆によって書かれたもので、私は、この8冊の本に感動して、そこに伊藤青年として登場する大徳寺昭輝さんを知り、勉強会に参加することになった次第です。

辻松さんと私は、矢追日聖さんに直接お会いしたことがなく、機関紙『おおやまと』のWeb上で、矢追日聖さんの教えに感銘をうけた「しんまい」で、林さんの言葉を冒頭にもってきたのは、そういう意図があったのです。機関紙『おおやまと』の無料公開は、本当に有り難く、大徳寺昭輝さんの勉強会の同じ仲間である池田茂さんと3人で、昨年の4月6日に大倭神宮月次祭に参加させていただきました。あじさい邑に戻って、林修三さんに法主奥津城や瑞光院、齋庭などをご案内していただき、その後、杉本順一さんから大倭を詳しく説明していただきました。友人が多い池田茂さんが、齋庭の荘厳に感動して、それ以後、池田さんの導きで、様々な人々が大倭を訪れるようになりました。

◀龍笛を聞かせてもらいました

▼全員で記念撮影

私は、その時にCDにコピーしていただいた矢追日聖さんの法話のテープを聴いて、今までの疑問が晴れました。それは、「顕幽不二」という言葉です。頭では分かるのですが、実感として分からなかったのです。法話のCDを聴いて、「顕幽一如が分からない人は、そういう世界があるんだということを認めてください。それが分からなければ、私の話は分かりません」という内容のものでした。「そうだ、実感として分からなければ、それはそれでいいんだ。そして、我々が生きていく中で、ご先祖さんや幽界の人々が必ず働いておられるのだ。自分一人ではないのだ」ということが妙に納得できました。

さて、神泉苑のすぐ北側に二条城があります。かつては神泉苑の領域であったのですが、良質の水が豊富な神泉苑に目をつけ、慶長8年（1603）、徳川家康が京都御所の守護と将軍上洛の際の宿泊所として築城しました。3代将軍家光以外は、ほとんど活用されなかったようですが、慶応3年（1867）10月13日に15代将軍慶喜が二条城の二の丸御殿大広間に、在京していた40藩の重臣を集めて意見を聞き、15日に「大政奉還」が成立しました。

城内をそれぞれが自由散策することになりました。江戸城が残存していない現在において、二条城は当時を偲ぶ意味でも絶好の建築物であります。国宝の二の丸御殿は、さすがに見応えたっぷりで、大広間、黒書院、白書院などのすべてに狩野派の障壁画が描かれ、欄間も技巧を凝らした優美な設えでした。本丸庭園や本丸御殿などもじっくり見て回ったら、集合時間の午後1時にギリギリ間に合った次第で、お腹をすかした皆様にご迷惑をおかけしました。

林さんのお目当ての飲食店が閉店だったので、あるラーメン専門店に飛び込みました。注文するに当たって、メニューはなく、スマホでバーコードを読み取って、スマホから注文するのです。4人ずつ三つのテーブルに陣取ったのですが、我がテーブルだけ4人ともスマホ使いが苦手で、手こずりました。お腹はすいているし、注文できなくて、イラッときました。「あ、また、やっちゃった」。「仲良うせい」という矢追日聖さんの声がしました。いざ、勘定になっても、また、店員さんが機械の使い方に手間取りましたが、矢追日聖さんの後押しで、イライラすることなく、勘定を済ませると、店員さんが店を飛び出してきて、何度も何度も謝っておられました。最後は気分良く、ラーメン店を後にすることができました。ここで解散。

帰途の「二条駅」までの道すがら、たまたま私と政治のことについて話していた人物が、なんと、機関紙『おおやまと』や『やわらぎの黙示』で再三登場される青山日元さんの息子さんの青山法義さんだと知り、冒頭の林さんのお言葉が、改めて身にしみた次第です。

最後になりましたが、林修三様、岸田哲会長、また、同行した「大倭の皆さん」この度は本当にお世話になり、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

「神通力如是（じんずうりきにょぜ）」の真意をさぐる　第二十六回

大倭教の源流にさかのぼって

今回の原文は前回の昭和16年11月20日の続きであり、12月8日の太平洋戦争開戦が直近に迫る中での霊界のあわただしい動きが描かれています。

スサノオノミコトをはじめ、タケミカヅチノミコト、フツヌシノミコト、ヤマトタケルノミコトなど『記紀』でおなじみの霊人たちが登場して、現界の動きに対して裏から働きかけている様子には興味深いものがあります。

原　文

昭和16年11月20日の続き

「我ハ、建速素戔嗚ノ。

我ハ征ク、今日妙法ノ剣モテ悪魔退治ナシクレン。皆者真ノ妙法トナヘ、国ヲ護レカシ。我ハ武ノ神引連レテ悪魔退治ニ馳セ参ゼン。我ガ日本ハ暫ノ間ニ修羅[1]ノ巷ト変ルゾヨ。我ハ征ク、南無妙法蓮華経」

「武甕槌命[2]、経津主命[3]、日本武尊[4]我等トモニ供致サン」

建速素戔嗚尊、門出御祝ノ神楽、倭姫。

「我レハ、日本武。

オバ[5]上、我レ是レカラ征ク、日本ノ為、悪魔退散ニ供ナサン。我レ暫シ時ヲ見テオバ君ニイトマゴイマカリ越シテ候」

倭姫命

「日本武カ、ヨク来タゾヨ。汝古ヘ、蝦夷[6]征伐ノ折、吾レヨリソナタニ興ヘシ剣、天叢雲[7]剣モテ思フ存分ニ悪魔ヲ蹴散ラシ候ヘ。コノオバハ国ニ残リ汝等ノ武運長久ヲ、我ガ日本ニ仇ナセル悪魔怨敵退散ノ題目、大倭日高見国鵄杜ニ行キ奇稲田姫命ノ御側デトモニ唱ヘ申サン。心オキナク征キテ働ケ、日本武ヨ」

日本武尊

「有難キオバ君ノオ言葉、吾レキットオバ君ノ御言葉ニソヒ申サン。御身ヲ大切ニ、サラバ」

（倭姫命　※編集部註釈）

「汝モ身ヲ大切ニ致シ、奉公第一ニセラレヨ。サラバヤ日本武、オバハ神楽奏シ、ソナタ等ノ門出ヲ祝ヒ申サン」

「吾ハ、奇稲田姫。

皆者、ヨク承ハレ、吾ガ背[8]君、建速素戔嗚尊、武ノ神等ヲ率キ連テ我ガ日本ニ仇ナセル悪[9]魔退治ニ出デラレ候。吾ハ女身、家ニ残リテ国家安泰、武運長久、悪魔退散ノ題目トナヘ申サン。題目。

背君ハ妙法ノ剣モテ、我ガ日本ニ仇ナセル悪魔退治ニ上ラレシゾ。吾レハ残リテ国ノ為、八百萬余ノ神等ト、トモニ妙法トナヘ、国ヲ護リマサン」題目。

日聖、云、右は宣戦布告に際しての実相なり。神国日本の所以なり。素戔嗚尊の「我が日本は暫の間に修羅の巷と変るぞよ」の御神示、我等一億民は真の妙法となへこの災厄を救はる可く神々に御祈願致さねばなるまい。この実相、未然に防ぐも、実現するも国民の心にあり。

仝日、正午

「大阪、名古屋、神戸、下関、東京、横浜、樺[10]太、舞鶴、敦賀」字にて現はる。

日聖、云、右も実相、之れ露西亜の空襲せんとする思の都市なり。防空陣の完璧を特に右諸都市に祈る。

仝日、午後九時半

倭姫、挨拶、神楽。

「我ガ日本ノ皇孫ノ、御ヨハヒ幾千歳ノ後マデモ、代代永久ニ変ラジナ、代代永久ニ変ラジナ」

「悪魔ハ夜ト昼トモワキマエズ我ガ日本ヲネライオルゾヨ。皆々コノ旨ヲ體シ、真ノ悪魔退散ノ題目トナヘ候ヘ、吾[11]妻ニ坐ス皇孫ヨ、ゴアンジ召サルナ、コノ日本ハ有難キ真ノ妙法、加護ノアル国」

註釈

①修羅の巷（しゅらのちまた）

激しい戦争や争乱の場所。

（小学館『日本国語大辞典』による）

②武甕槌命（たけみかづちのみこと）

神通力如是第15回（令和3年9月号掲載）の註釈③に詳しい。この時には法主と親しい間柄であった武術家國井道之氏に武甕槌命が憑って神語りを行った。

③経津主命（ふつぬしのみこと・経津主神）

㋐日本神話で、磐筒男神（いわつつのおのかみ）・磐筒女神の子。天孫降臨に先だち、武甕槌神と共に葦原の中つ国を平定し、大己貴命（おおなむちのみこと）を説得してその国を皇孫瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）に譲らせた。刀剣の神。香取神宮に祀る。

（岩波書店『広辞苑』による）

㋑経津主命・布都主命・布都怒志命とも。「日本書紀」で天孫降臨に先だち、タケミカヅチとともに葦原中国（あしはらのなかつくに）平定に派遣された神。イザナキがカグツチを斬った際にしたたった血から化生した磐裂根裂（いわさくねさく）神の孫。「古事記」にはみえない。また「出雲国造神賀詞（かんよごと）」では天夷鳥（あめのひなとり）命とともに派遣されたとする。フツは物を断ち切る擬声語で、刀剣の神。ヌシをもつ神名の成立は新しいといわれる。「肥前国風土記」に物部経津主之神とあり、本来物部氏に奉斎されていたか。「古語拾遺」は香取神宮の祭神と記す。

（山川出版社『日本史人物辞典』による）

④日本武尊（やまとたけるのみこと）

「古事記」では倭建命、本名は小碓（おうす）命。記紀伝承上の人物。景行天皇の皇子。母は皇后の播磨稲日大郎姫（はりまのいなひのおおいらつめ）。大碓（おおうす）尊は双子の兄。景行天皇に命じられて九州南部の熊襲（くまそ）を平定し、さらに東国に派遣されて蝦夷（えみし）を討ち、帰途病をえて伊勢に没した。その間に草薙剣（くさなぎのつるぎ）の霊力や弟橘媛（おとたちばなひめ）の入水、尊の死後その霊が白鳥と化するなどの話があり、とくに「古事記」には多くの説話がおりこまれる。大和政権による地方の平定を一人の勇者の物語として伝えたものと思われるが、「古事記」の説話が孤独な英雄として描き、人間性・文学性豊かなものであるのに対し、「日本書紀」は天皇の命をうけて征討の任にあたる国家の将軍として描いており、両者にはかなりの相違が認められる。

（山川出版社『日本史人物辞典』による）

⑤オバ上（うえ）・君（ぎみ）

「神通力如是」の中では、倭姫は第11代垂仁天皇の娘であるという通説とは異なり、第10代崇神天皇の娘であるという。それに従えば倭姫は日本武にとって大伯母・大叔母（祖父垂仁の姉妹）ということになる。通常であれば、景行天皇の妹である倭姫は日本武の叔母でよいのだが、しかしまた福武書店の『福武古語辞典』によれば、「おーば」には祖母、老女、老母の意味があるといい、日本武が大伯母（おおおば）・大叔母である倭姫のことを「オバ上」と呼ぶ可能性も否定できない。

⑥蝦夷（えみし）

古代の東北地方を中心とした地域の住民に対する呼称。毛人（もうじん）・蝦蟹（かい）・蝦狄（かてき）・夷・俘囚（ふしゅう）・夷俘（いふ）など多様な表記・表現があり、「えびす」とも読み、平安中期以降は「えぞ」と読む。

古くは東国の人々を毛人と称したが、のちに言語・風俗・文化などを異にし、政治的にも朝廷に従わない人々を区別して蝦夷とよび、奈良時代以降は服属した蝦夷を大きく蝦夷・俘囚に編成した。語源や実体がアイヌか否かをめぐり諸説があるが、現在のところ定説はない。

（山川出版社『日本史広辞典』による）

⑦天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ・草薙剣（くさなぎのつるぎ））

スサノオが八岐大蛇（やまたのおろち）を退治して、その尾から得た剣。もとの名は天叢雲剣で、名は、大蛇のいる上に常に雲気があることに由来するという。記紀や「古語拾遺」によれば、剣は伊勢神宮に伝来し、ヤマトタケルの東征のときに授けられ、のち熱田社に伝わった。名義はヤマトタケルがその剣で草をなぎ払ったことによるとされる。宮中にも三種の神器の一つとして草薙剣があったが、壇ノ浦の戦の際、安徳天皇とともに海中に没した。

（山川出版社『日本史広辞典』による）

⑧背君（せのきみ）　せ（夫、兄、背）

夫、兄弟、恋人などすべて男性を親しんでい

う語。主として女性が用いる。せこ。せな。せな。せのきみ。せろ。

（小学館『日本国語大辞典』による）

⑨悪魔退治

他の場所では「悪魔退散」という言葉が使われているが、ここでは悪魔退治という言葉が使われている。ここで「退散」ではなく「退治」という強い表現が用いられていることに注目したい。

⑩樺太（からふと）

北緯50度以南の南樺太は、明治38年～昭和20年まで日本が領有していたため第二次世界大戦前は38万人の日本人が居住していた。

（小学館『日本大百科全書』による）

⑪吾妻（あずま）

〈景行紀に、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征の帰途、碓日嶺（うすひのみね）から東南を眺めて、妃弟橘媛（おとたちばなひめ）の投身を悲しみ、「あずまはや」と嘆いたという地名起源説話がある〉東国。畿内から見て東方の地域。古くは碓氷峠・足柄山以東、逢坂の関以東、また伊賀・美濃以東をいったが、奈良時代にはほぼ遠江・信濃以東、後には箱根以東の関東一帯を指すようになった。

（岩波書店『広辞苑』による）

「アズマハヤ」

吾嬬はや「わが妻はああ」といふ嘆息語。日本武尊が東征の際、足柄峠（一説に碓氷峠）に登り、相模の海で尊に代わり龍神の犠牲になられし、弟橘媛を回想し給ひし語。

（平凡社『大辭典』による）

現代語訳

建速素戔嗚「私は建速素戔嗚ノ。

私は戦いに征く。現今妙法の剣を持って悪魔退散をしてみせよう。皆の者真の正法を唱え、国を護ってくれ。私は武の神々を引き連れて悪魔退治に駆けつけよう。私達の日本は暫くの間に戦いの場と変わってしまうだろう。私は征く。南無妙法蓮華経」

三人の神々「武甕槌命、経津主命、日本武尊、私達も共に建速素戔嗚尊の供をいたします」

（建速素戔嗚尊の門出の祝いを倭姫が奏せられる）

日本武「私は日本武です。

老母上、私はこれから戦に赴きます。日本の為、悪魔退散をされる素戔嗚尊の御供をいたします。私は少しの間ですが時間をみつけて老母様にお別れにやってまいりました」

倭姫「日本武ですか。よく来られました。あなたは昔、蝦夷征伐の時に、私からあなたに差し上げた剣である天叢雲剣を持って思う存分に悪魔を蹴散らして下さい。この老母は国に残りあなた方の武運長久をお祈りし、私共の日本に仇をなす悪魔怨敵退散の題目を大倭日高見国の鵜杜である大倭神宮に行って、奇稲田姫命のお側で一緒に唱えます。あなたも心おきなく行ってお働きなさい。日本武よ」

日本武「ありがたい老母様のお言葉。私は必ず老母様の御言葉通りにやってみせます。くれぐれも御身を大切になさって下さい。失礼いたします」

倭姫「あなたも身体を大切にして、ご奉公を第一にして下さい。お別れです、日本武。老母は神楽を奏し、あなた達の門出をお祝いいたします」

奇稲田姫「私は奇稲田姫です。皆の者、よくお聞きなさい。私の夫、建速素戔嗚尊は武の神達を引き連れて私共の日本に仇をなす悪魔を退治に出発されました。私は女の身ですから、家に残って国家安泰、武運長久、悪魔退散の題目を唱えます（題目）。わが夫は妙法の剣を持って、私共の日本に仇なす悪魔退治に出かけられました。私は残って国の為、多くの高級霊人の方々と一緒になって妙法を唱え、国を護ります」（題目）

日聖は告げる。右のことは宣戦布告に際しての実相である。日本が神国であることの為なのである。速素戔嗚尊の「私共の日本はもう暫くの後に激しい戦いの場所に変わってしまう」の御神示を、私共一億の国民は真の妙法を唱えこの災いから救われるように御祈願しなければならないだろう。この実相を未然に防ぐのも実現させてしまうのも国民の心にかかっている。

同日、正午

「大阪　名古屋　神戸　下関　東京　横浜　樺太　舞鶴　敦賀」（以上の地名）が字にて現れる。

日聖は告げる。右のことも実相である。これらはロシアの空襲しようとする思いの都市である。防空システムの完璧なることを特に右の現れた諸都市に対して祈るものである。

同日、午後九時半

倭姫（挨拶、神楽）「私共日本の天皇の子孫の方の時代は何千年の後までも、代々永久に変わることはありません。代々永久に変わることはありません」

奇稲田姫「悪魔は夜と昼とも関係なく私共の日本を狙っています。皆々一人一人このことを心に収めて悪魔退散の題目を唱えなさい。東京におられる我が子孫の天皇よ、心配にはおよびません。この日本はありがたい真の妙法のご加護のある国です」

あじさい日誌

6月11日　大本宮拝殿で大倭会主催の禊会。この日は藤本宏秋さんの誘いで初めての三木宏祐さん（兵庫県豊岡市）や久しぶりに金澤秀光（大阪府堺市）さん、出口三平・中村勝彦・三宅博子さん等、参加者12名で色々な話が尽きませんでした。

6月12日　奈良市の埋蔵文化財調査センター所長の鐘方正樹・山口等悟氏が、紫陽花邑で保管している奈良朝頃の陶棺を下見に来られました。埋蔵文化の展示会に出したいとのこと。

この陶棺については、昭和43年5月23日発行『すさのお』第20号参照。

6月15日　大倭神宮月次祭。

この日参加していた喜多村和人さんから自然農の川口由一さんが亡くなったと伝えられました。（※奈良県桜井市、84歳）

浅井克明さん《…略…6月9日昼すぎに亡くなったそうです。6月10日午前10時半ごろ、農作業や共同作業のため赤目自然農塾を訪れていた僕たち塾生が1ヶ所に集められ、塾代表者から直接、川口さんが昨日逝去されたと全員に伝えられました。新聞の訃報によれば、午後3時9分、脳卒中のため自宅で死去。近親者で葬儀を行ったとの由。

逝去2日前の晩、仕事帰りに岡寺駅前の神社入口で1匹の蛍を見ました。その翌晩、神社にほど近い道の植え込みでまた蛍を1匹見かけました。同じ蛍？……「虫の知らせ」だったのかもしれません。僕が奈良へ移住した直接的な動機は自然農を学ぶためだったのですから》

6月23日　大倭大本宮月次祭。「大倭七十九年」後半の始まり、沖縄慰霊の日でもあります。

この日の法話は昭和38年6月23日月次祭より、本紙に「大倭の宗教が目指すところ」として掲載分（平成20年6月号）。

6月30日～7月2日　FIWC関西委員会有志17名が広島スタディ・ツアー。福山市のホロコースト記念館、平和公園、シュモーハウス等へ。

7月2日　午前9時から大倭墓地の掃除が行われました。

7月6日　大倭神宮月次祭。

午後6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

7月4日　中堅職員研修会を13名が受講しました。（菅原園）

6月16日　音楽と共に自動で出てくるシャボン玉でレクリエーションをしました！（須加宮寮）

6月22日　水害避難訓練。ヘルメットを被り3階に避難。

6月29日　菅野台第3街区公園で地域清掃を行いました。（長曽根寮）

6月14・15日（デイ）「七夕」の作品作りをしました。

6月4日（特養）施設周辺の紫陽花の前で写真撮影を行いました。

7月1日　長曽根寮57年創立記念日をお祝いしました。（茂毛路園）

6月8日　牛ヒレステーキといちごショートケーキで6月誕生者3名のお祝いをしました。（八重垣園）

特に変わりなく過ごしてます。

大倭会通信

▼令和5年6月新入会、山田隆夫・昭代さん（奈良市）

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

8月6日(日)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭教立教開宣祭

8月15日(火)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会

8月20日(日)　大倭大本宮境内の清掃神事として午前9時より。なお大倭墓地清掃を午前8時から行います。

＊月次祭（大本宮）

8月23日(水)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊東光大祭及び祖霊祭

8月30日(水)　上欄に詳細。

東光大祭　祖霊祭　祭典のご案内

令和5年8月30日(水曜日・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。正午から、奥津斎庭において祖霊祭が行われます。祖霊祭が終わり次第、拝殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭の間、拝殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花邑の記録映像等をご用意します。

ご注意　祖霊祭の経木への書き込み受付は8月3日まで。あまり日数がないので、お急ぎ下さるようお願い致します。

第349回大倭会文化行事

～大倭に縁（ゆか）りの地を訪ねて紀伊方面へ～

日にち　令和5年10月1日（日）～2日（月）
1泊2日　※例年より早めです。

行き先　【1日目】高野山／長慶天皇陵／平維盛歴史の里など
【宿泊】龍神温泉　季楽里（きらり）
【2日目】日置神奈備（ひきかんなび）・日出神社／名草戸畔（なぐさとべ）伝承地・宇賀部（うかべ）神社など

費　用　2万6千円

申　込　8月31日まで（定員27名）

問合せ　教務本庁　0742-45-1192
溝口富士男　携帯 080-3101-1639
林　修三　携帯 080-2527-0840